

願わくば、死ぬまで走っていたい

北米大陸横断フットレース

北米横断レースは2011年6月から8月にかけて行われた。
アメリカ合衆国の西海岸ロサンゼルスから東海岸ニューヨークまで5139キロを70日間で走破する。
ぼくはこのレースに出場し、完走した。

文・坂東良晃
タウトク編集人、1967年生まれ。1987年アフリカ大陸を徒歩で横断、2011年北米大陸をマラソンで横断。世界6大陸横断をめざしてバカ道をゆく。

写真提供＝越田信さん、菅原強さん、浪越保正さん、井口章司さん、岩田智さん、石原良昭さん、田中義巳さん。ありがとうございました。



毎日平均73キロ。90キロ以上走る日も。毎日、夜明け前の朝5時にスタートする。真夜中にゴールを迎える日もある。1日の休みもないから、大ケガをしたらジ・エンド。多くのランナーはひどい故障を抱えながらも、壊れていないパーツを駆使して走りつづける。ゴールがどんなに遠くても前進する。

「地平線」ってすごく遠くにあるように思うけど、空と地面の境目って5キロから10キロくらい先のあたりにある。だから地平線は大して遠くない。「1時間くらい走ったら地平線のあたりかな」なんて計算している。



どこまでも荒野ばかりのアメリカ西部。一日じゅう走っても、店も街も何もない。この荒れ果てた原野に夢を見いだして、幌馬車で隊商組んで、カントリー歌いながら（実際は歌ってないけど）、やってきたアメリカ人の精神性は想像を絶する。



日傘を差して乾燥地帯を走る日本人ランナー・越田信さん。史上たった2人しかいない2度の北米横断を成し遂げた尊敬すべきランナー。



走りながら食べ、走りながら小便をする。ときには走りながら眠ることもある。



暑い。気温は50度。熱風に焼き尽くされるようだ。アスファルトからの輻射熱で脚も焼かれヤケドする。



シューズの底は1週間もしないうちにすべてなくなってしまうので、道に落ちているタイヤのゴムを接着剤で貼り付ける。



砂漠では全身に氷水を「霧吹き」でかけながら進む。水をそのままかけても身体は冷えない。水滴の気化熱によって、皮膚の表面温度を下げるのだ。



世界各国のサポートクルー、大会スタッフ、ランナー。みんなが永遠の恩人であり戦友。



足の裏のマメが破け、血と膿が混じったものでドロドロになる。着地するたびに、針山の上をゆく激痛。血液が止まるほど強くテーピングし、さらに鎮痛剤の錠剤を飲み続ける。帰国後、右足の痛みが4カ月もとれないと思ったら、足の甲を疲労骨折をしていた。4カ月して気づくのも変なもんだが、骨折箇所より痛い部位の痛みが取れて、ようやく自覚したのだ。



毎晩、モーターのベッドのうえで、山盛りの食事をとる。翌朝のレース開始まで少しでも体力を回復させたいから、ベッドに横になったまま動かない。トイレには床を這いずりながら移動する。

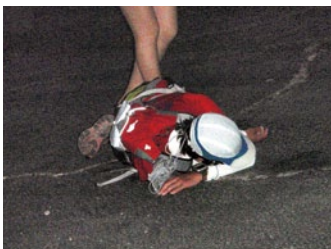


主催者のロールさん、フランス人。いつもゴールで待っていてくれる。厳しくて明るい人。「明日はもう走れないかもしれない」と訴えると、たいてい「明日のことは明日考えなさい」と返される。「たくさん食べて、よく眠る。それが今あなたのできること」。



(左)ゴールラインを超えると、気力が一気になくなり、脚が身体を支えられない。レース中でも倒れるのは珍しくないから、ゴール後に倒れたって誰も心配しない。「早めにホテルにチェックインして」と急かされるだけ。
(右)倒れずにゴールにたどり着けたときは猪木の「ウッシャー」を極める。

1日のゴールのたびに倒れ込む。毎日、からだがスカスカになるまで摩耗する。足がもつれ、意識が飛ぶ。ロレツも回らない。もうこれ以上何も出てこない。だけどニューヨークは数千キロも彼方なのだ。それでも走るのを止める気には一度もならない。走力なし、根性なし、足はケガだらけ。でも走る。とにかく、ぼくには、走るという選択肢しかない。



日本から同行した4人のサポートクルーの皆さんに助けてもらう。いずれの方もジャーニーランナーとして超一流の実力を誇る。彼らにとってぼくなどランナーとして赤子レベル。そんなぼくをニューヨークまで走らせるため、3キロおきに食事や飲物を用意し、氷水をぶっかけてくれる。1人では何もできなかった。



15人のランナーたちは明るく強いサムライ。弱音を吐いているのはばく1人。みな冗談を言いあって、笑いながら走る。どんなに深刻なケガをしても笑って走る。



東へ東へとむかう日々。道路を牛や馬やアルマジロがのんびり横断する。毎日、登りたての朝日のシャワーを正面から浴び、夕陽で長く伸びた自分の影を追いかけて走る。



ロッキー山脈にさしかかる辺りで左太腿に炸裂音がして肉離れをおこす。動かなくなった左脚を固定し、右脚1本で歩きつづける。



どんなダート道であろうと、大会運営スタッフが道を間違えないよう路面に矢印を書いてくれている。5000キロにわたって大変な努力である。白い文字は小麦粉で書かれている。



つだ。二千年つづいてる宗教戦争からレンタルCD屋の音楽のジャンル分類、きやりーはみゆはみゆまで、世の中どーでもいいことに大騒ぎし、どーでもいいことに価値つけてして商売にし、経済活動のうねりとする。やがて富める者と餓える者に分かれ、悲惨が増幅する。その摂理を受け入れられないばくは、後天性アスペルガー症候群を自覚する。共感者の少ない世俗から逃れ、エクストリームの世界に戻りたくなる。

太陽の周りを70〜80べん、回転している分生きていたら、天寿をまっとうしたと評される。その間、他の動植物を何万トンと補食しながら生きながらえる。世のため、他人のために何ひとついいことしてないばくでも、ワトリ・ブタ・牛・魚を数千匹食い殺し、ああ満腹とゴロ寝する。人間1人を生かすために数千匹の動物たちが殺戮される必然はあるのだらうか。まあーないんだらうね。ありがたい話が得意な僧侶や聖職者でも、説明するのは難しいかな。

いい物は食べたくないし、いい酒もいらない。ガリガリ君と麒麟端麗生があればいい。立派な仕立ての服や、ローンで組んで買う舶来腕時計もいらない。ジャージ上下とガーミンGPSがあれば生きていける。つけられたい粋な戒名もなく、入りたいデザイナーズ墓石も収まりたいデザイナーズ仏壇もない。お骨は人知れず地面の肥やしになればいい。守るものもなく、捨てるものもない。願わくば、死ぬまで走っていたい。それだけでいいのだ。

長い距離をどこまでも走りたい。そこに大した意味はない。わけもなく、あちらこちらをウロウロしているという点では、野良犬や徘徊老人とさして変わらない。

自分を痛めつけ、自分がどうなるのかを知りたい。これもS Mクラブで女王様にムチ打たれてヨダレを垂らしている小太りなオジサンとか、手首ザクザクナリストカッター少女と性的嗜好性としては差異はない。

イワシをはじめ回遊魚たちは泳ぐのをストップするとエラから酸素を吸収できなくなり窒息死するらしい。油断してばーっと休憩したら即死なのだ。ばくもやり続けるしか生きていけない。物理的に何か行動しないとダメってんじゃないくて、脳みそを崖つぶちのへりに置いておかないと生きている必然が蟹気楼みたいにゆらゆら煙りだす。

一般に、極限を好む冒険家たちが、高山や極地を目指したり、深い海に潜ったりして生死の境界に足を踏み入れると、曼荼羅絵のシャワーを浴びるように生の素晴らしさを体感する。ところが下界に戻り、陸に上がると、反動が大きすぎて生きている意味が希薄になる。何が重要で、何が些末なことなのか判断できなくなる。「街では生きていけない山男」の完成である。

下界は人間社会の微細な感情のやりとりで構築されている。旅から帰ると、人が値打ちがあると信じるポイントに共感できなくなり、頭をかかえこむ。「この服はダサくて、あの服はオシャレ」などの評価基準はもっともよくわからないもののひと